知的障害をもつ ひとり暮らし高齢者を どう支えるか

事例提出者

Hさん（在宅介護支援センター・看護師）

事例の概要

S氏（男性）79歳（身長148cm、体重38kg）

紹介経路

H13年4月18日、近所の人より電話が入る。「以前はよく外を出歩いているのを見かけたのですが、近頃はあまり見かけない。近隣としてどこまで手を出せばいいのかわからず、電話をかけました」

初回面接

4月19日

S氏は在宅介護支援センターより徒歩5分ほどの所に住んでいる。訪問して驚く。今どきこんな人がいるのだろうか。文化的な生活をしている人たちに囲まれた住宅街の一角に、ところどころ瓦や天井板が抜けて星が見える部屋で寝起きしているのは、一見ロマンチックのようにも見えるが、やっぱりすさまじいとしかいいようがない。惣菜が入っていた発泡スチロールのパックや、枯れた葉っぱ、古い広告紙等を米の空き袋に突っ込んで、外にも家の中にも幾重にも積み上げている。丸めてある布団は汚れてたとえようのない色に変色している。すぐ傍に置いてあるこたつの掛け布団も同様である。そのこたつに入ってご飯を食べているS氏を見て、またまた驚く。髭は伸び放題で仙人のようだ。顔色は青黒く生気のない目をしている。何日も着替えていないだろうと思える服からは何ともいえないすっぱい臭いがしているし、家の中からは象やカバのし尿のような悪臭がして吐き気をもよおしそうになり、思わず手で口を押さえてしまった。

ひとり暮らしだとわかっていたが、「ひとりで暮らしているの？」と確認する意味で聞く。この質問にはキョトンとしていた。立ち上がって、台の上に置いてあったお茶漬けの袋に入っている東海道五十三次の絵を次から次へと見せてくれる。私を歓迎してくれているのかもしれない。なにせすさまじい環境で生活しているS氏だけに、私は一線を引いて彼を受け入れてい

スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介します（検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えのない範囲で変更させていただきました）。

たのに、彼はそんな私を疑う風でもなく、初対面とは思えないほど愛想がよく、人なつこい。

外に古い冷蔵庫が置いてある。扉を開けると、煮魚、焼き魚、煮豆、ハム、豆腐、ちくわ、生卵等のできあいのおかずが10日分くらい入っているが、半分は賞味期限が切れている。冷蔵庫を指さして「ここのものを食べているの？」と聞くと「うーん、うーん」と声を出して答える。意味が理解できているのだろうか。痴呆もあるのかもしれないな……。ヘルパーさんにお願いしても訪問を断られるだろうな……と思いながら今日のところは帰ることにした。途中、近所の奥さんが草取りをしていたので、「あの家のおじいさんを訪ねて来る人はおられるのですか」と聞くと、「たまに男の人が来られて冷蔵庫の中をのぞかれているようですよ」、さらに「家の前でひなたぼっこをしているおじいさんを見ると、今日も元気にしているなと安心するんですよ」とも。結構、近所の人に可愛がってもらっているんだなと、やや意外に感じた。

確かこのあたりに施設のボランティアに来てくださっているＹさんがいたなと思い、訪ねた。Ｙさんによると、Ｓ氏の兄か弟が時々出入りしていること、７年くらい前までは子持ちの女性が住んでいたこと、そしてその女性の住所や電話番号を教えてもらった。

ADL

食事……自立

排泄……尿、便意（+）和式トイレ…中腰でするため両下肢に汚れ多い。後始末ができず肛門、パンツ、手指に便（+）

着脱……声かけにて自立。ときどきパンツを後ろ前にはいている。

清潔……全介助

移動……ボツボツと自立歩行。段差は手すりを要する。

視力障害……なし

聴力障害……軽度の難聴

言語障害……単語程度はしゃべる

理解力……言葉でのコミュニケーションは困難なことが多い。ゼスチャーのほうが通じる。

痴呆……あり

IADL

家事一般……炊飯器の取り扱いはできるとき

もあるが、中の釜を入れずに本体そのものに米と水を入れてスイッチを入れて炊いている。また、米と水を入れすぎて炊きあがったご飯がお粥状になっていることもある。

買い物……できない

金銭管理……できない

趣味活動……今のところわからない

経済状況

生活保護受給（実弟が管理している）

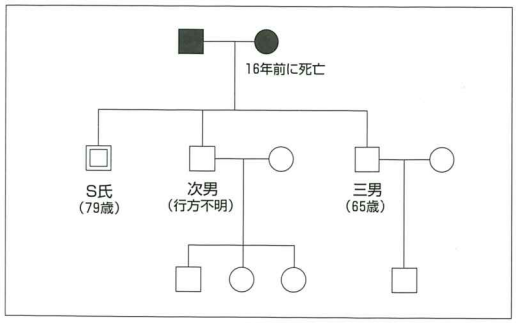
既往症

精神発達遅滞（４歳の頃発症）

気管支喘息（Ｈ７年９月発症）…２種類の内服薬が処方されている

心不全（H10年４月発症）

左変形性膝関節症（H13年６月発症）



援助経過

４月23日

生保担当者に電話を入れ、おおまかな概要を話すと、「ふーん、そんな生活をしているとは知らなかったね……民生委員に連絡してみますよ」「民生委員には連絡しているが他に方法はないだろうか」と再度聞いても、民生委員がいちばんでしょうとの返事だった。

６月１日

結局、民生委員のほうからは何の連絡もないので、７年前まで一緒に住んでいたという女性に頼るしかないと思い、電話を入れてみた。Ｓ氏のすぐ下の弟（現在、行方不明）の妻という。その妻の話によると、昔は皆で住んでおり、あの家で舅姑を見送った。姑が亡くなる前に知的障害のＳ氏の面倒を見てやってほしいと頼まれ、一緒に生活してきたが、７年くらい前にＳ氏に物干し竿で耳が半分ちぎれるほど叩かれ、子どもを連れてあの家を出た。「怖くってね、あのときは殺されるかと思いましたよ」と力の入った声だった。何を聞いてもうなずくＳ氏からは想像もつかない話で驚いた。出入りしている人は、Ｓ氏の一番下の弟（三男）だと教えてくれ、「Ｓさんもかわいそうな人でね……」とつけ加えて話す。その弟がＳ氏の生活保護費をすべて取り上げ、自分たちの生活費に充てているという。「Ｓさんもあの町内で生活するからには、毎月町内会費を300円払わなければいけないのですが、弟は知らんぷりで、結局私が払い続けているんですよ」とも。そして、三男の住所、電話番号を教えてくれた。

弟はＳ氏宅から５kmくらい離れたところに住んでいる。電話を入れると、何年も前から自分がお米10kgと、10日間くらいのおかずを冷蔵庫に入れていること、１年くらい前までは銭湯に連れて行っていたが、ある時銭湯に「汚いから来るな」と断られたこと、それ以降Ｓ氏は自然

と服を着替えなくなったこと等を電話口で喋り続ける。4歳の時に脳膜炎の後遺症で知的障害者となり、字や数字は書けないし読むこともできないが、生活をしていく上でしなければいけないことは習慣でできていると言う。買い物等はできないので、栄養面や本人の好物を考えた上で買っている、身内としてするべきことはしている、と結構強い口調で言う。20分くらい経っただろうか、切れ間を見つけて介護保険サービスの一つである通所介護を利用すれば入浴ができることを説明すると、「お金がかかるようなことでは困ります」と低い声だが、はっきりと言った。ともかく介護保険の申請を勧める。

6月11日

弟が介護保険の申請をする。

6月29日

介護保険の申請をしたが仕組みがわからないので説明してほしい、と弟がセンターに来所する。お金だけ管理して、あのような暮らしを平気でさせている弟とはどんな人だろう、と少しドキドキする。もったいぶった言い方や、世の中すべて知り尽くしているぞ、という態度に、思った通りの人だなという印象をもった。

負担金がかからなければサービスの導入には賛成すると了解をもらった。

その日のうちに支援センター内でプランの原案がおおまかにできたのでサービス担当者会議の日程を決める。

7月10日

在宅介護支援センターにおいてサービス担当

者会議を開催する。出席者は、民生委員、生保担当者、三男夫婦、サービス提供担当者（ヘルパー、デイサービス）、支援センターのスタッフ。出席できない主治医からは、注意事項をあらかじめ聞いておいた。要介護認定の結果は3であった。

生活の改善に向けて話し合った。当面するべきことは、家や外の片づけと住宅改修に絞られた。住宅改修期間中は、ショートステイを利用することとした。

8月3日

住宅改修も終わり、見違えるほど立派な部屋になったが、家が新しくなった分だけ失禁が目立つ。リハビリパンツをはいたものの、新しいものには馴染めず、濡れると中のポリマーを取り出したりしている。

※

現在、訪問介護を週3回、デイサービスを週1回利用している。

本人への援助はいい方向に向かっている。ヘルパーが訪問するとS氏はとても嬉しそうな顔をし、帰るときは何ともいえないほど寂しそうにするという。最近は、顔を洗い、タオルで拭いている姿を見るときもあるという。とはい

え、人間らしい生活が送れるようになるまでの道のりはまだまだ遠いようだ。

ケース検討会

奥川　いま、Hさんが一番気になっているのはどんな点ですか。

Hさん　事例を書きながら思ったのは、大事な初期段階で三男と信頼関係が形成できていなかったな、ということです。それと、今後ご本人の生活をより質の高いものにしていくためには、どんなふうに援助していけばいいのか、この２点が気になっています。

奥川　では、今日皆さんに検討していただくのは、三男と信頼関係が結べなかったのはなぜなのか。そして、ご本人に対する今後の援助計画をどう作っていけばいいのか。この２点ということでいいですか。

Hさん　はい、よろしくお願いします。

S氏を取り巻く状況をアセスメントする

奥川　では、ご本人とそれを取り巻く関係者、そしてHさんたちが置かれていた状況をより明らかにするために必要な情報をHさんから引き出してみてください。

発言　ご本人の生育歴について、ご存知のことがあれば教えてください。

Hさん　学校は小学校２、３年までしか行っていないようです。その後は、現在住んでいる家で、家族のなかで暮らしていたようです。

発言　家族関係はどうだったのでしょう。

Hさん　父親がいつ亡くなったかはわからないのですが、長く母親を中心に男兄弟（３人）で暮らしていたようです。母親は16年前に亡くなっています。ご本人が長男で、すぐ下の弟（次男）はお嫁さんをもらい、結婚後も実家に一緒に住んでいました。ところが、いつの頃からか次男はあまり家に寄りつかないようになって、現在は行方不明になっています。７年前に次男の妻と３人の子どもが出て行くまでは、ご本人と次男家族の５人で暮らしていました。三男はわりと若い時期に家を出たようです。車で10分ほどのところに住んでおり、お米やおかずをご本人のところに持ってきています。

発言　お母さんとご本人の関係は？

Hさん　知的に障害があることを大変心配されていたようで、亡くなる時も三男や次男の妻に「よろしく頼む」と言い遺して亡くなられたということです。

発言　三男が生活保護のお金を自分の懐に入れているということですが、三男自身の経済状況はわかりますか。

Hさん　経済状況まではわかりません。三男の

妻はうつ病があって働ける方ではないそうですので、共働きではなかったと思います。現在は、三男の年金で生活していると思います。

発言　7年前に本人から次男の妻が竿で殴られ、子どもを連れて家を出て行ったということですが、どんな事情があったのでしょうか。

Hさん　その日、ご本人は3食食べていたにもかかわらず、寝る前にまた食べようとしたので注意したらしいんです。一度言っても聞こうとしないので、ちょっと強く言ったところ、急に怒り出して殴られたということでした。

発言　それに類したことはちょくちょくあったのでしょうか。

Hさん　具体的には聞いていませんが、ヘルパーが入ると決まったときに、三男が「何度も同じことを言うと怒り出すかもしれないから、気をつけてください」と言っていました。

発言　次男の妻と三男の関係はどうでしょう。

Hさん　よくないと思います。三男は「本人では管理できない」という理由で生保のお金を預かっているにもかかわらず、1カ月300円の町内会費も払わず、次男の妻がそれを肩代わりしています。センターでの会議にも、三男が出席することがわかると、次男の妻は来ませんでした。

発言　喘息の薬が2種類処方されていますが、定期的に受診はしているのですか。

Hさん　1年前までは、三男が月に1回受診に連れて行っていました。ですが、1年ほど前に銭湯から「あまりにも汚いから、もう来ないでくれ」と言われてしまい、それから本人は着替えもしなくなり、三男も恥ずかしくなって連れて行っていません。ですから、1年間は気管支喘息の薬を飲んでいませんでした。

奥川　いま受診に連れて行っているのは？

Hさん　ヘルパーです。三男はお米とおかずを運んでくるだけです。あとはすべてサービスでできると思っています。

なぜ三男と信頼関係が結べなかったのか

発言　銭湯に「汚いからもう来るな」と言われたとき、三男はどう感じたでしょうか。

Hさん　ご本人の今の生活ぶりに話を向けると、「ホームレスよりはましな生活ですよ」というようなことを言います。汚いと感じていても認めようとしないのかもしれません。

発言　三男自身の生活は普通に成り立っているのですか。

Hさん　自宅までは訪ねたことはありませんが、ごく平均的な生活だと思います。

発言　報告を聞いていると、たしかに三男は生活保護のお金を自分の懐に入れたり、サービスの利用料金を払うのを拒絶したりしているようですが、ヘルパーやデイの利用には同意していますし、全体的に見ると受け入れはよくなっているのではないかと感じたのですが。

Hさん　たしかに……。三男の立場からすれば、突然親戚でもなんでもない私たちが出てきて「家が汚い」とか、「デイとかヘルパー」とか

言われたわけで、三男にしてみれば、これまで病院に連れて行ったり、米やおかずを運んだり、まがりなりにも兄の生活を支えてきたのは自分だという思いがあったんだろうなと思います。

奥川　とても大事なところに気づきましたね。Hさんたちが入ったことで、家もきれいになり、ヘルパーが来たりデイに行くことでお兄さんの生活が変わった状況を見て、いま三男はどう感じているでしょう。

Hさん　三男さんはもともと頭のいい人で、いろいろな資格をとってバリバリ働いてきた人です。だけど、定年退職になって、自分はまだまだ仕事をしたいのだけど、働き口はなかなかない。そんなことがあるせいか、ふとした拍子に「どうせ私など社会では役に立ちませんから」という言葉が出たりします。自己評価が下がっているのかもしれません。私たちも、基本的には三男の了解を取ってから物事を進めてはいたのですが、タイミング的に事後報告になってしまっていたこともあります。そういったもろもろを考えると、これまで自分が支えてきたのに、知らない人間たちがどんどん兄の生活に入ってきて、たしかに家もきれいになったし生活も安定してきたけれど、三男自身は取り残されているように感じているかもしれません。本当はそのあたりにも配慮しながら援助をしていく必要があったのかもしれませんね。

奥川　それが「三男と信頼関係を結べなかったのはなぜか」という一つ目の課題に対する答えですね。自分で言えましたね。

Hさん　はい。

奥川　自分のなかから自分の言葉で自然に出てくるのが、最も深い気づきなんです。グループスーパービジョンでは、これがとても大事な点です。皆さん、質問が上手でしたよ。

今後、どんな点に着目してかかわるべきか

奥川　では、第2の課題について考えていきましょう。今後の援助計画をどう考えるか。そのためには、どんな点を検討する必要がありますか。5分間グループで話し合ってみてください。

・5分間、グループで話し合う。

奥川　いかがでしょう。

グループ1　弟が長男を見てきた過程を聞くことが必要ではないかと思います。

奥川　それは何のためですか。

グループ1　今後、弟さんの援助する力をより高めていくためです。

奥川　今後の援助を考えたとき、強力なキーパーソンとなるかもしれない三男を強化するということですね。そのためには、これまでのサポートの過程を聞いてねぎらうことが大事ですね。

そちらのグループはいかがですか。

グループ2　三男にケアチームの一員として入っていただき、援助の役割分担のなかで、どの部分を担ってもらうのかを相談する必要がある

のではないかと思いました。

奥川　三男を強化した上で、改めてチームの一員として援助の組み立てを一緒に考えてもらうということですね。

そちらのグループはいかがですか。

グループ3　私たちの話し合いのなかで出たのは、Hさんが考えている「人間らしい生活」というものは、どのあたりの水準を指しているのだろうね、ということでした。

奥川　つまり、Hさんの言う「人間らしい生活」の水準とご本人や三男が考えている水準が一致しているのかどうかということですか。

グループ3　そうです。

奥川　Hさん、いかがでしょう。

Hさん　今のお話を聞きながら、私はご本人の気持ちを聞いていなかったな、と思いました。はじめから「できない」と決めつけてかかっていました。自己決定能力があるのかどうかをきちんと査定せずに、こちらの考える水準を押しつけていたような気がします。

奥川　とても大事な点ですね。では、自分の意思を言葉で表明できない人の場合、どういうふうに意向を確かめればいいですか。

発言　痴呆の方でも同じですが、どういう時にどんな表情をするのか、その一つひとつをひたすら観察することだと思います。特に、どんな時に心地いい表情をするのか——。

奥川　そうですね。あとはこの方の場合、言葉に対する認知能力がどのくらいあるのか。それを推し量る必要がありますね。

発言　最近は自分で顔を洗ったり、タオルで拭いているということなので、学習能力はあるのではないかと思ったのですが。

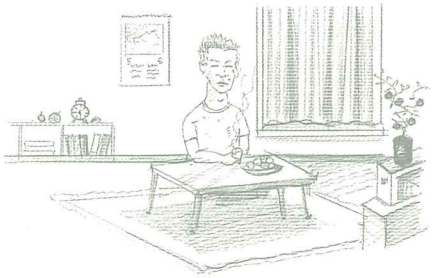
Hさん　たしかに、ヘルパーの話では、最初の頃に比べて多少言葉が増えているそうです。

奥川　ということは、どういうことですか。

Hさん　他人がかかわることで、力がついている——。そういえば、トイレにしても和式から洋式に変えたことで、最初は失敗ばかりしていたのですが、最近はちゃんと使えています。

奥川　かなり順応力がある人のようですね。そのほか、Hさんたちがかかわりだしてからの5カ月の間に何か変化したことはありますか。

Hさん　変化しているというと……、例えばこういうことがありました。デイから帰るときにスタッフがお花を差しあげたそうなんですが、次の日ヘルパーが訪問してみると、ジュースを飲んだ後の空の容器に差して、台の上に置いてあったそうです。



奥川　すごいですね。人とのかかわりのなかで、どんどん力を出していますね。

そちらのグループはどうですか。

グループ4　次男の妻が一緒に暮らしていた頃のSさんの心身の状況や生活の様子を聞くこと

も大切ではないかという意見が出ました。

奥川　とても大事な点ですね。特に、Ｓさんにとって重大な出来事が起きたとき、どんな様子だったか。16年前にお母さんが亡くなった時はどうだったか。そして、怒りが爆発してしまって次男の奥さんたちが出ていったときはどんな様子だったのか。それまではどんな機能が保たれていて、その後どのように変わってきたのか。１年前にも、銭湯に拒否され、三男が病院へ連れて行かなくなるなど、大きな変化がありましたね。そういった節目節目の状況については確認しておく必要があるでしょうね。そのことによって、Ｓさんがいま発揮している能力が元々もっていたものだったのか、新たに獲得した力なのかといったことがわかりますよね。

Ｓさんのすごいところ、持ち味はどんな点でしょう。

Ｈさん　人なつこいところでしょうか。

奥川　それが生きる上でかなり助けとなっていますよね。それと動物的ともいえる生命力も相当強いですね。

さて、これまではいわば緊急時の対応でした。ここから、どうやってＳさんの生活を支えていくか。Ｈさん、いかがですか。今後の援助について見通しは立ちましたか。

Ｈさん　はい。まずは、本人の自己決定能力がどのくらいあるかをきちんと見極めて、残っている部分については働きかけていきたいと思います。そのなかで、地域福祉権利擁護事業についても、利用するかどうかをＳさんと一緒に考えてみたいと思います。

三男さんについては、生活保護のお金をもう少しご本人の生活のために使ってもらえるよう、少しずつ信頼関係を結びながら話していきたいと思います。

また、最終的には施設の利用を視野には入れています。ただ、施設に入ってしまうと生活保護のお金が出なくなってしまうので、三男が抵抗すると思うのです。ですから、三男さんとご本人のことについて話ができる関係をつくりつつ、施設入所についても相談するタイミングをはかっていきたいと思っています。

奥川　だいたい整理できましたね。最後に私のほうから３点ほど。一つは、医療の部分を押さえておくためにも、専門医にケアチームの一員に入ってもらったほうがいいでしょうね。それと、生活保護費に関してですが、生活保護のケースワーカーは、保護費がどのように使われているかを把握する必要があるんです。それをしないのは、はっきり言えばワーカーの怠慢です。この点については、Ｈさんがチームのメンバーとして提言することも必要でしょうね。そして、やはり三男がこれまでやってきたことをきちんと聞いて、保証することです。そのことで、三男も変わるかもしれませんよ。

では、Ｈさん、最後に感想をどうぞ。

Ｈさん　今日皆さんに検討していただいたおかげで、明日からご本人に対して、また三男さんに対しても違った見方で接することができそうです。ありがとうございました。